

亀頭の先端が触れる。それだけで身体が痺れるようだった。

——ずぶぶつ、ぬぶぶつ……ぐにゆうううつ！

「あつ、ああつ、ああああ~~~~つ♡♡♡」

カリ高の大きなエラが膣内を抉り、そのまま一気に根元まで貫かれた。まるで串刺しだ。太くて長くて硬い肉の棒に身体を中心に突き破られたような衝撃。それでいて痛みはなく快感ばかりが京香の身を襲う。圧倒的な質量を誇る巨根に内臓を押し上げられ、お腹がぼこり膨らむほどの圧迫感を覚えながらも同時に幸福感に包まれる。

「あつ、だめつ、あ、あああ~~~~つ、そ、そんな、奥まで……はひつ、はひつ」

ユウのモノでは届かない場所まで満たされ口について出るのは、男のイチモツを称賛する言葉ばかり。

「んひいひいっ！ お、奥ううつ、奥まで入ってくるうつ！ んひいっ、ひつ、ひぐうつ、ひぐうつっ！」

人間らしい言葉など吐かせてもらえない。京香に許されたのは『大きい』『凄い』『奥』の三単語を使った言葉の組み合わせパズルだけ。それ以上の語彙は全部おちんぼ気持ちいいに上書きされた。

しかも刈谷は、女はデカければ適当に突いても泣きわめくと考える勘違い睾丸肥大野

郎ではない。しっかりと京香を感じさせるため把握済みの弱点を的確に責めてきた。

——パンツ、パンツパチユ、パチユン!

肉のぶつかる音が響く。Gスポットをゴリゴリ削るように刺激され、さらにポルチオをズンズン突き上げられる。

気持ちいい♡ 気持ちいい♡ 気持ちいい♡ 気持ちよすぎて頭がおかしくなる。ユウくんとは全然違う。ちんぼの大きさだけでも桁外れなのにテクニクも凄くて、私の弱いところを的確に抉ってくる。

ユウのセックスは優しいけど物足りなくて、抱かれるほど欲求不満が溜まっていた。刈谷のセックスは時に乱暴だが、強引にねじ伏せられてお前は俺の女になったんだぞと一理解《わか》らせられるのが好きだ。いくら頭で小賢しいことを考えていても、女はおまんこを気持ちよくされたら目の前の男に屈してしまう生き物なのだと突きつけてくる。それに最初は反発もしたが一度受け入れてしまうと、こんなにも幸せで満たされた生き方はない。

「ああ……そこお……♡ そこ、すご……ああああ……♡♡♡」

「ここがいいのか? もっとして欲しいんだな」

「うん♡ うん♡ そう、そうなの♡♡ す、素敵い……ああ……ああ……いいわあ……す、すごく大きい……はあ……はあ……はあ……はあ……すごい……ああ……すごいのお……」



そう言う小春の声は上ずり早くも興奮している。彼女は母親が浮気相手に犯されてる姿をおかずに自分でおまんこをかき回していた。指を第二関節まで挿れて媚肉をこねる。ぐっぽぐっぽと愛蜜で満たされた蜜壺が粘着質な水音を奏でた。

「あんなエグイ形した生ちんぽで引っかけられて気持ちよくないわけないでしょ。いくら母さんでも女なら一回してもらっただけで墮ちるわよ」

言いながら結花も妹の横にオナニーをしている。京香がイッたらすぐに抱いてもらうため、おまんこが乾かないようにしているのだ。

「うん、そうかも」

二人の視線は結合部に注がれていた。娘の前にも関わらず京香はアへ顔を晒してヨガっている。その顔に普段の理知的な面影はなく、ただ快楽を貪ることしか頭にない雌豚に墮とされている。

「ほら、娘たちも見てるよ」

刈谷の言葉で京香は娘に見られながら犯されていた事実を思い出す。途端に子宮がキュンキュンとうずいた。二人の前で大股開きにした股間を男に串刺しにされ喘いでいる。かつて二人をひり出したおまんこを今は、浮気相手のデカチンでズボズボしてもらい気持ちよくなっている。最低な母親だ。娘の手本になれることなんか何ひとつない。だというの

に京香は今、とても幸せな気分になっていた。

腰を打ち付けられるたびに肉と肉がぶつかり合う音がした。刈谷の穂先は京香の最奥までたどり着くと、そこからさらに一押しして内蔵を突き上げる。膣奥が引き伸ばされ、行き止まりが行き止まりでなくさせられてしまう。脳天まで貫くような快感に京香は身を震わせた。全身が痙攣する。しかしそれでもなおピストンは止まらない。むしろ激しさを増していく。

「ああッ！ 見られてるのにッ！ むすめがッ！ 見てるのにッ……止まらないのおッ……あっ♡ あっ♡ あっ♡ い、いく……イッちゃう……あっ、あっ、あっ、あっ♡♡」

あまりの快感に耐えきれず京香は身体を仰け反らせた。

「もう四回目だよ。ほんと京香は淫乱だな」

「ああ……だって……あなたのが……ああ……いいのよ……ああ……ああ……あああっ♡」  
「そんなに僕のが気に入ったの？」

「篤史さんとのセックスが一番いいわ。こんなに大きくて、相性がよくて、何も考えられないくらい気持ちいいちんぽ初めてなの。だから、もっとして……」

「いいよ。たくさんしてあげる」

「はあ、あッ、篤史さんのお、おち、んぽ、気持ちいい、わ……」



あんッ♡ ああッ♡ いいッ♡ いい、いいわあッ♡」

膺壁をこそぎ取るように擦られるたびに京香は声を上げる。前のほうの肉襷をゾリゾリされるとたまらない。刈谷は腰だけでなく身体ごとぶつけ、京香をベッドから押し出すようにピストンしてくる。腕に力を入れ、ピンと伸ばした肘で前に滑っていきそうな身体を受け止めながら、彼女は肉穴を蠢かせ続ける。

「そこお、すご、おッ♡ そ、そんなところまで……ひッ♡ ひッ♡ んおッ！ おまんこッ♡ おくッ♡ ぎもぢっいいッ♡」

尻を揉みしだかれ、ヒップラインが歪みそうになるほど驚掴みにされた。そのまま左右に引っ張られながら肉杭を打ち込まれる。菊の窄まりなんか丸見えだろう。見て！ 見たいなら！ それでおちんぼ硬くしてくれるならアナルいくらでも見て！

肉の棒が抜ける寸前まで腰を引いた位置から、再び突き入れてくるときに肉ピラが巻き込まれる。お腹の奥がジンと熱くなり、意識が持っていられる。京香は自分がどんな格好をしているのか想像して余計に感じてしまった。みっともない自分に相応しい雌犬のポーズ。ちんぽの先っぽが子宮をノックする。何度も何度も打ち付けられる。そのたびにおまんこが悦んでしまつて頭が真っ白になった。正常位とは違う場所をゴリゴリされるのがたまらない。膺奥が疼いて仕方がない。京香は切なげに喉を鳴らし、甘ったるい声で啼き始める。

「あああん、だめっ♡　そこっ、だ、ダメえっ♡　あっ、あっ♡　これっ、これすごいっ♡  
あっ、あっ♡」

そんな淫乱雌の声を聞いた彼は勢いをつけてひと際力強く突き挿れた。

どちゅん、という重い打擲音と共に肉槍の先端が最奥を穿つ。

京香はたまらず悲鳴じみた喘ぎを上げ、背中を弓なりに逸らせて絶頂した。

「んはあああああ~~~~~♡　あっ、あっ、あっ、あっ……」

今まで経験したことがないほどの深イキだった。子宮がぐつぐつに煮えたぎり、おまんこが痙攣する。京香は全身から力を抜けさせ、シーツの上に倒れ込んだ。

絶頂の波が引いていかない。膣内がビクビクと震え、肉茎をきゅうと締め付けている。まるで精液を搾り取ろうとしているかのようだ。

京香は荒い呼吸を繰り返しながら、子宮から広がっていく甘い痺れに酔い痴れる。

こんなにも深く激しいアクメは初めての経験だった。ゴム越しでも自分の人格や人生観を粉々に破壊したちんぽを生で挿れてもらうのだから、京香も当然それなりの覚悟はしてきた。そのうえでこのザマである。

過去のセックスでは味わえなかった愉悦に京香は陶醉しきっていた。

——だがそれも束の間のこと。



刈谷が抽送を再開した。

「ひううっ♡ まっへっ、ひぐッ、まだっ、まっへっ、またっ……あうッんっ♡♡」

京香は呂律の回らない舌で必死に懇願する。だが刈谷は聞き入れてくれない。

「辛いかもしれないけどもう少しだけ耐えてくれ。ぼくはまだイッてないんだ」

そう言いながら刈谷は自分がイクためだけの単調な動きはしない。京香の身体を知り尽くした腰使いが精密射撃のように弱点ばかり触れてくる。どんな時も彼は女のことも悦ばせようとす。今はその気遣いで気が狂いそうだ。

「ここ好きだよね？ ほらっ！ ほらっ！」

「ひあッ！ しゅごいッ！ あッ！ だめえッ！」

京香は片脚を刈谷の肩に担がれ松葉くずしの体位を取らされる。奥深くまで挿入するこ  
とに適した体位で秘奥を小突き回された。

「はは、すごいね。京香のおまんこ、ぼくのちんぽに吸い付いてくるよ」

「ああッ！ これッ、ふ、ふかッ、すごいッ！ ああ♡ んっ♡」

「子宮口が開いてきてるよ。わかるかい？ 本番ではここにぼくの子種を注ぎ込むからね」

「きてッ、おくに、ほしの♡」

「じゃあ一番深いところで出させてもらってもいいかな？」

「だしてッ！ いちばんっ……おくにつ、かけてえっ♡」

「ああ、出るよ、出すよ！」

今度こそ刈谷はイクつもりだ。小刻みに腰をカクつかせて摩擦回数を稼ぐ。尿道まで迫り上がってきた精液を押し出そうとしてるのだ。膣内で肉竿が膨張するのを感じる。射精の前兆だ。

「イクぞ！ 中に出してやる！」

亀頭が子宮口にめり込み、熱い飛沫が弾けた。その衝撃で京香の頭の中で火花が散る。理性は完全に吹き飛んだ。

「あッ、あぁん♡ イく、イく！ イクッ！ なかに、だひて♡ きてえっ♡ せ、せーし♡♡」

子宮に直接注がれる子種の熱さに京香は歓喜の声を上げた。脳みそまで精液漬けにされたようだと思うも白一色、何も考えられない。ただひたすら気持ちいい。おまんこがキュンキュンうねうねしてちんぽからチューチュー精液を吸い出している。たまらない。もっとして欲しい。もっともっと。京香は本能のままに腰を揺らめかせる。

「ああ、ああ……きもちいい……ああ……ああ……♡」

こんな幸せなことがあっていいのだろうか。身体の芯まで満たされた気分だ。心も身

体も彼でいっぱいになるのを感じた。

「どうだった？ 生でするのは」

「今までで一番凄かったわ♡」

「よかった。期待外れだと言われたらどうしようど不安だったんだ」

心にもないことを言ってしまうと思うが不快ではない。彼のすること京香が嫌いになれることなどひとつも残っていないのだ。

「そんなはずじゃないじゃない。あなた以外の人となんてもう無理なもの」

京香は刈谷にキスをする。彼の唇は柔らかくてとても美味しい。

「次は娘たちも気持ちよくしてあげてね」

京香が言うど順番を待っていた結花の背筋がしゃんと伸びた。イケない程度のオナニーでウォーミングアップを済ませた身体は、乳首がピンピンに勃起している。